



TEIKOKU DATABANK Historical Museum

Muse

2014.3
Vol. 22

帝国データバンク史料館だより [ミューズ]

温故知人 03

消滅危惧言語・満州語を
残し、伝える

4万語収録の大辞典を編纂、
自費出版する歴史学者 河内良弘さん

《逸品解題3》―始まる―

事業所があった街をたずねて、高山篇

消滅危惧言語・満州語を残し、伝える。

4万語収録の大辞典を編纂、自費出版する歴史学者
京都大学／天理大学・名誉教授 河内良弘さん



■満州語と出会って60余年
中国第一歴史档案館の
清朝公文書を読み解く

17世紀、満州族のヌルハチが建国した清の公用語、それが満州語です。清朝歴代の公文書は満州語、漢文、モンゴル語の三語で書かれていましたが、詔勅や歴史書など官僚の文書はまず満州語で正本が書かれ、そこに漢文が添えられていました。清代の半ばから逆転し、主に漢語が使われています。

今から50年以上も前、当時、天理大学で教鞭をとっていた私は、満州語と満州語を研究されていた今西春秋先生から満州語で書かれた資料の分厚い写真集を見せていただく機会がありました。その時、自分もいずれ原文を読みたいと思って、その資料をさらに写真に撮らせてもらいました。

その後、京都大学に奉職した私は、資料研究のために中国の北京や東北地方（遼寧省、吉林省、黒竜江省）を訪問する機会を得て、その時に立ち寄ったのが、中国第一歴史档案館でした。初め、私は博物館見学のつもりで漫然と回っていたのですが、その中どこかで見たことのある資料が目飛び込んできました。尋ねてみると、かつて今西先生に見せてもらった満州語の資料で、私の手元にある写真版と同じものらしい。しかし、実際に手持ちの資料と見比べてみると断定できません。それで写真に撮らせて欲しいと言ったのですがやんわりと断られ、それを頼み込んで、やっと送ってくれたフィルムを現像したところ、はたして今西写真本と全く同じものでした。

私の手元にあった写真版は、墨で塗りつぶされ、判読できない箇所がありました。これをどうしても読みたい。原本なら裏を透かしたら見えるに違いない。私が持っている資料もたくさんある。それで北京に

通い始めたわけですが、最初の頃は文字通りの門前払い。第一歴史档案馆のある故宮・西華門から一步も中に入れてくれません。外国人に清朝の公文書、それも原本を見せ、コピーさせるはずがないと。それを日本から来たんだ、何とかしてくれと、粘りに粘って。やがて何とか許され、それから毎年、20年近くも通い続けました。もちろんすべて私費、持ち出しです。

■アメリカの大学で満州語を教える。…が、三種の神器「文法書」「辞書」「読本」がない

私の専攻はもともと東洋史。女真族や満族史などを研究していました。そんな私に転機が訪れたのは、1970年代末、交換教授で赴任した米国・インディアナ大学で3人の白人学生に満州語を教えた時です。まず困ったのが、教える文法書がないこと。そして辞書も日本語の「満和辞典」を英訳したものしかありませんでした。つまり、語学を学ぶ三種の神器である、辞書も文法書も読本もない。自分で満州語を英語に翻訳し、教材にしました。

その後帰国したら、日本も同じような状況でした。そこでまず文法書を出版しました。しかし辞典はやはり戦前に出版された「満和辞典」のみ。何しろ70年以上も前の辞書ですから使い物になりません。言語学者は通常3〜4種類の辞書を脇に置いて研究するものですが、日本にその環境がなかったのです。

■辞書をつくる決意をし、たった1人で始めた編纂作業。

「満州語の辞書をつくらなければ…」と思ったのは、1980年代の終わり頃でしょう。か、中国の満語研究所と協力してつくろうと考えました。しかし辞典の編纂方針や発行時期などの条件が合いませんでした。

私はパソコンを使う、満洲文字を入れる、例文をたくさん入れる、その例文には日本語の訳をつけると考えていたので、あらためて1人でスタートすることにしました。ところが私はパソコンで文章ぐらいは書けますけど、プログラムやソフト開発はできません。しかし辞書の編纂にはソフトのできるソフトが必要でした。さらに満州語の文字は手書きでなく、

でしたが、ようやく出版社を見つけ、5月には書店に並ぶ予定です。出版費用についてはいろいろなところに声をかけましたが、今のところ八方塞がりです。自己負担です。しかし自費でも何でも出版しなければいけません。満州語辞典がなければ、満州語で書かれた資料を読んでいくこともできません。また、正確に読むには例文が必要です。辞典は約4万語を収録し、別冊の索引をつけ、日本語、満州語、ローマ字のいずれからも引けます。例文もできるだけ多く掲載しました。

■民族の歴史、文化を知るには言葉を知ることが必要です。

私は言語学者ではありません。そんな私が辞書を編纂するのは、今から考えると無謀に近い話です。ただ、これまで言語学者が扱った資料は歴史の史料ではなく、もっぱら文学関係が多かった。例えば『金瓶梅』ですね。しかし金瓶梅をいくら流暢に読めても、役所特有の単語が出てくる公文書は読めないのです。やはり歴史学者がやらなければいけない分野があり、これも私の仕事かな、という使命感もありました。

満州語を読まずとも、満州語を漢文で書き写した文書を読めばいいと考える人もいますが、漢文では満州族の本音はわかりませんし、ニュアンスもちよつと違います。例えば清朝の始祖ヌルハチはちよつと変わった人で、昼寝が好きだとか、昼ご飯をつくる人が特別にいたとか。これらのことは漢文では省かれていて、満州語の原本を読んて初めてわかることです。小さな事件、小さな事柄を知るには満州語を知っていないとなりませんし、小さい逸話を知るほど、人物なり歴史が生き生きとしてきます。

日本でも最近ようやく公文書管理法が施行されましたが、中国では早くから檔案、



満州語で書かれた清朝や明の時代の文書



古文書を所蔵する「中国第一歴史档案馆」(中国・北京)

パソコンのフォントを使用したいと考えましたが、それもありません。困っていた時に知ったのが、香川大学の本田道夫先生です。それから二十何年、満州語をソフトでできるソフト開発からフォント作成まで、本田道夫先生と二人三脚でやってきました。

出版できるあてもなくコツコツつくってき

いわゆる公文書や古文書、記録というものを重視して保存に取り組んでいます。かつて資料の散逸や、読めなくなることを危惧したのが周恩来首相で、革命後、満州語の読める人材を養成しました。それが中央民族学院で、そこに満州語が話せる人、主に錫伯(シベ)族の生徒を集め、満洲文字と満州語で文書を読ませる訓練をしたのです。その人たちが今幹部になり、後進の指導をしています。

言葉が無くなれば、それを話す民族やその文化までもが失われます。言葉、言語というのは民族固有のものですから、満州語を伝えるということは民族性を保存することと同じです。錫伯族によってかううじて伝えられた満州語が残るのはあと20年だろうと危惧されています。だからこそ、今のうちに日本と満州語を繋ぐものとしての辞典を残していきたいのです。

逸品 解題

始まる

企業の歩みを語る上で欠かせない「もの」がある。
原点でもあり、象徴でもある「もの」を残し、
伝えてきた企業博物館にとってこの一品はまさに逸品である。
第3回は「始まる」をテーマにお届けする。

腰掛式サイホンゼット便器

1927（昭和2）年〔TOTO歴史資料館所蔵〕

国会議事堂や

日本初の高層アパートで採用された

「国産初の高級腰掛便器」

1914（大正3）年に誕生した国産初の水洗便器は、構造も簡単で、寸法の小さいものだった。しかし、グレードの高い建築物においては賓客がトイレを使用することもあり、見た目も大きく豪華な高級腰掛便器が要求された。

従来の便器を大きくするだけでは洗浄が不十分という理由から、開発は洗浄方式も含めた便器の構造自体を新たなものにする必要があった。そこで、東洋陶器（現TOTO）は新しい構造の便器の開発を始めたのである。構造が複雑なこともあり

開発に時間がかかり、27（昭和2）年、国産初の大型高級腰掛便器をようやく発売できた。

この便器は36年に完成した帝国議会議事堂（現国会議事堂）を始め、日本で最初の高層アパートといわれる同潤会アパート

など、昭和時代初期の歴史的価値のある建物に多く採用され、日本の

近代化に大きく貢献した。



ユニットバスルーム（写真は1964年製の別機種）

1963（昭和38）年〔TOTO歴史資料館所蔵〕

日本で初めての画期的な「お風呂場」

サウナのような蒸気浴にルーツを持つ日本のお風呂の歴史は、豊臣秀吉の朝鮮出兵を機に木製の風呂桶がつくられ、個人用の家庭風呂が誕生した。江戸時代に入ると鉄砲風呂や五右衛門風呂などの家庭風呂が登場し、過熱装置が組み込まれることによって、それまでの蒸気が主体の風呂から湯につかる現在のスタイルが変わっていった。大正時代に風呂桶や浴室がタイル張りになり、明治に入ってから英国から輸入したシャワーが設置されるなど、近代化が進む。

東洋陶器（現TOTO）は1963

（昭和38）年に大便器、洗面器、浴槽を一つの空間にまとめた日本初の「ユニットバスルーム工法」を開発した。従来の浴室に比べ保温性にすぐれ、工期短縮にもなるという画期的な商品で、翌年、オリンピックに向けて急ピッチで工事が進められていたホテルニューオータニに設置されて話題を呼び、その後ホテルを中心に普及していった。



TOTO歴史資料館

■福岡県北九州市小倉北区貴船町 2-2

■TEL:093-951-2534

■<http://www.toto.co.jp/social/museum/>

麦わら帽子製造用環縫ミシン(昭三式ミシン)

1928(昭和3)年

量産型家庭用ミシン 15種70型

1932(昭和7)年

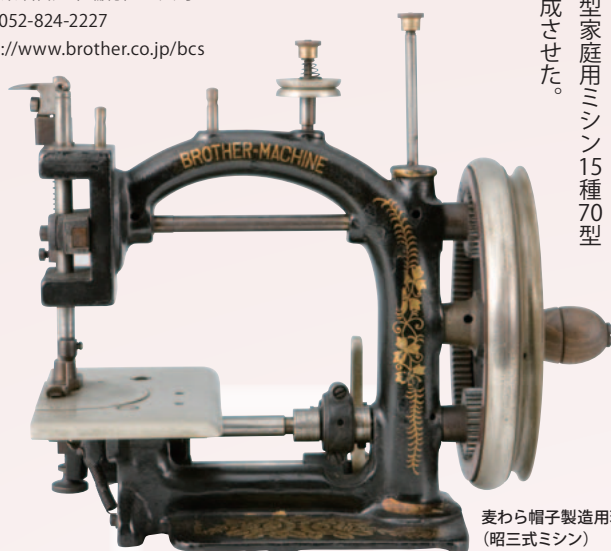
「ブラザーコミュニケーションスペース所蔵」

国産ミシンの一号機と家庭用量産ミシン

ブラザー工業のルーツは、1908(明治41)年に創業したミシンの修理や部品の製造を行う「安井ミシン商会」にさかのぼる。当時、輸入品のみだったミシンの国産化を手がけ、麦わら帽子製造用環縫ミシンの開発に成功。28(昭和3)年に販売を開始したことから「昭三式ミシン」と名付けられ、初めてブラザーブランドのついた製品となった。これがブラザー工業のミシン製造の始まりである。

同時期に販売していた麦わら帽子水圧機で得た利益をもとに家庭用ミシンの開発に着手し、数年後、ついにミシンの心臓部である

シャトルフックと呼ばれる部品の開発に成功した。ミシンを造るための設備も自分たちの手で開発し、32年にブラザー工業初となる量産型家庭用ミシン 15種70型を完成させた。



麦わら帽子製造用環縫ミシン
(昭三式ミシン)



量産型家庭用ミシン 15種70型

ブラザー コミュニケーション スペース

■愛知県名古屋市長区瑞穂区塩入町5-15

■TEL:052-824-2227

■http://www.brother.co.jp/bcs



ソフト自販機「TAKERU」

1986(昭和61)年

「ブラザーコミュニケーションスペース所蔵」

通信回線を利用した、

世界初のパソコンソフト自動販売機

1986(昭和61)年、パソコンやゲームソフトが必要な時は店頭で並んでいるものを購入するのが当たり前だった時代に、ISDN回線を利用してフロッピーディスクにソフトをダウンロード購入するという、世界初のパソコンソフト自動販売機が登場した。それまでにない画期的な発想であったが、今のようにADSLや光回線のある時代ではなかったため、ソフトをダウンロードするのに時間を要し、通信費がかかりすぎて事業としては成功しなかった。

その後、「TAKERU」の技術やノウハウを使った、世界初ネットワーク配信カラオケ、JOYSOUNDが誕生。「TAKERU」は、後に幅広く展開していくネットワーク・コンテンツ事業の第1号機であり、ブラザー工業にとっての逸品である。

ギアマンの牛乳瓶

江戸時代末期(推定)

ブリキ製牛乳缶(5勺容器)

1881(明治14)年頃

【トモエ牛乳博物館所蔵】

日本における牛乳普及の 始まりを伝える貴重な史料

江戸幕府8代将軍徳川吉宗が日本で本格的な酪農を手がけて以降、牛乳は限られた層の人々が滋養強壯として飲んでいたとされる。この牛乳瓶は、ギアマンと呼ばれていたガラスでつくられており、日本における最初の牛乳瓶と言われている。蓋をするネジ切りがあるのが特色である。明治時代に入ると牛乳を飲む習慣が少しずつ広がり始めた。人々は鍋などの容器を持参して牛乳屋へ行き、はかり売りで買っていたが、のちに5勺(約90ml)入りのブリキ缶で配達されるようになった。始めは蓋がなかったが、後に和紙や厚紙、コルク栓で蓋をしていたという。しかしガラス瓶が使用されるようになるとブリキ缶は法律で禁止された。以来、時代によって牛乳用のガラス瓶は容量や形を変えていき、第二次世界大戦中には、資材の欠乏からビール瓶など様々な瓶でつくった黒褐色の瓶も登場した。

1950年代に入ると、無色の広口ガラス瓶に蓋として紙のキャップが登場した。キャップの上には牛乳であることを示す紫色のセロハンが掛けられていた。

トモエ牛乳博物館

■茨城県古河市下辺見1955

■TEL:0280-32-1111

■http://www.tomoemilk.jp



ゴルフクラブ「スターライン」

1933(昭和8)年

【ミズノスポーツロジィギャラリー所蔵】

ゴルフ人口1万人の時代の、 日本初の国産ゴルフクラブ

1922(大正11)年、日本を訪問中のイギリス皇太子が親善ゴルフをしたことがきっかけで各地にゴルフコースがつくられた。

ミズノは33(昭和8)年にゴルフ用具を輸入販売する一方で、自社工場でもクラブ製造を開始する。この年発売したのが、日本初の国産ゴルフクラブ「スターライン」である。2年後には売り場スペースを拡張するとともに、

インドア練習場を設けた。ゴルフ人口が全国で1万人に満たない時代の話である。

36年にはミズノ製で初めての

鍛造アイアン「トーナメント」を発売、

その後も軟鉄鍛造の「センターバランス」

「ハイパワー」「オールニッポン」を、

次々と売り出している。新しい素材

開発への取り組みは、やがて

82年のカーボン、90(平成2)年の

チタンに結実していく。

ミズノスポーツロジィギャラリー

■大阪府大阪市住之江区南港北1-12-35

■TEL:06-6614-8411

■http://www.mizuno.co.jp/gallery/



未来のために、振り返る。伝統・技・匠の心でつくるランドセル。

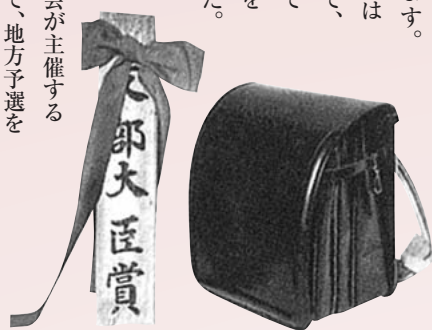
ナース鞆工は、1948（昭和23）年に私の父が立ち上げた依田製鞆所がルーツ。創業当時は終戦間もない頃で物資がなく、船の帆や車のシート材を再利用し、通学用かばんを製造していました。ランドセルは東京製品といったら東京から始まったものですが、特に足立区には多くのメーカーがあったようです。50年頃から市場に革が流通し始め、現在のような、いわゆる「学習院型」と呼ばれるランドセルを手がけるようになりました。できあがったランドセルをリヤカーに積んで日本橋や馬喰町などの問屋街に納品したと聞いています。

58年、当社は日本で初めて、ランドセルで文部大臣賞を受賞しました。

日本鞆協会が主催するコンクールで、地方予選を

通過したあらゆる種類の鞆が集まる全国大会で、ランドセルが受賞したのはその時が初めてだったそうです。

この頃のランドセルは芯材に分厚いボール紙を使い、厚い革で仕立てられていたのが大変重く、1.5kgほどあります。現在は金具



でロックする構造になっていた蓋は、この当時はベルトを使っていました。

100余年の歴史を持つランドセルは、基本的な性能に変わりはありません。それでも時代とともにサイズ・色・機能性は進化しています。A4サイズの教材の主流になればそれに伴って大きくし、子どもたちのファッショニ化に合わせて多色展開を行っています。今では赤と黒は全体の1割程度で、ほとんどがパステル系やビッド系の中間色です。さらに子どもの体格に合った背負いやすさや新素材の採用による耐性の向上を目指し、軽量化は常に目標の1つとなっています（写真①）。

当社では、すべての製品ではありませんが、時代時代のランドセルを保存しています（写真②）。新しい製品を開発するにあたって、過去を振り返るのも非常に大事なことです。昔のもののづくりは雑だったかもしれないけれど、しっかりとっている。昔の機能性を見直すこともできます。

ランドセルは子どもたちにとって、なくてはならぬものであり、子どもが自分の意思で選ぶ初めての持ち物。親や祖父母も交えた3世代が一緒にコミュニケーションできるものでもあります。当社もこれまでの伝統を活かし、匠を始めとする人の手による技を継承しながら、優れた製品を届けていきたいと考えます。

②ランドセルづくりの歴史を物語る、歴代のランドセル。左から昭和28年製、36年製、40年製



ナース鞆工株式会社 代表取締役社長 依田光展氏

①カラフルでバラエティに富んだ、現在のランドセル

事業所のあった街をたずねて

鉄道が、
歴史と経済をつなげた城下町。

高山篇



1935(昭和10)年高山市街図
【所蔵：高山市教育委員会】
●高山出張所が最初に開設した高山町川西610



日本列島の中心に位置する岐阜県高山市は、
2005年の市町村合併により、日本一面積が大きい市となった。
この地にも帝国興信所は出張所を設けていた。

開設後2年で一時閉鎖、再開したもののわずか7年間に
4度の移転を繰り返したあげく、
閉鎖を余儀なくされた高山出張所である。

■城下町から経済の中心地へ 旦那衆が牽引

高山は岐阜県に位置するが富山県に近く、
帝国データバンクが行う同市の調査は昔も
今も富山支店が担当している。JR高山駅に
高山本線の特急が到着すると、白川郷行きの
バスに乗る人や市内観光に向かう人で溢れ、
外国人観光客の姿も多い。高山観光で多く
の人が訪れる古い街並みは、「さんまち」と呼
ばれるエリアに集中している。1586(天
正14)年から100年近く飛騨国を治めた金
森長近は高山城を築き、城の周りを武家地と
し、さらにその下を町人の住む町「三町」とし
た。以来高山の商業の中心地として栄え、帝
国興信所高山出張所もこの地に事業所を構
えていた。

金森氏は山林政策に力を入れ木材を諸国
へ販売し、利益を得て街道を整備した。また、
旦那衆と呼ばれる豪族が中心となり、酒造
業、製糸業などが盛んになっていった。
1934(昭和9)年には高山に29の工場が
あったが、酒醸造10件、製糸5件と、この2業
種で半分を占めていた(『高山市史第3巻』、
1983年8月)。旦那衆のひとり永田家は
様々な事業を手掛けていた。12(大正)年
に刊行した『帝国銀行会社要録 初版』によ

■高山出張所の活動 地道にひっそりと

1927(昭和2)年7月、帝国興信所は独
自の地域経済を形勢していた高山町に調査
拠点としての出張所を開設した。「飛騨国高
山方面に於ける調査報告の敏速と正確とを
期する為め」(『脱俗』、1927年7月)であ
る(写真①)。

開設当初事務所を置いた高山町川西は、商
工業を営む家が多かった。警察、裁判所、役
場、郵便局、官庁とも隣接していた。その後
何度か事務所を移転していたが、詳細な資料
がなく全ての場所を特定することはできな
い。ただ一時期を過ごした空町は町名変更
され、現在の天性寺町・吹屋町・島川原町に
町名変更になっていることがわかった。今
は市の駐車場として「空町」の文字を残すの
みである(写真②)。

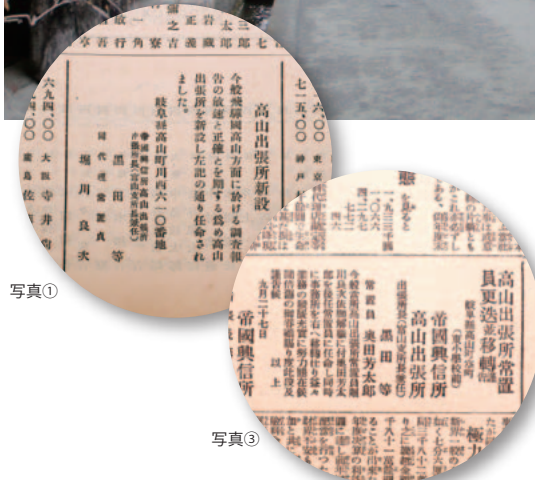
29年12月6日付『帝国興信日報』の記事(写



永田家の酒蔵
現在は飛騨高山まちの博物館の敷地内にある



写真②



写真①

写真③

高山出張所の変遷

1927.7.11	岐阜県飛騨国高山町川西610に開設
1928.1.30	岐阜県高山町2元町1に移転
1928.9.27	岐阜県高山町空町に移転
1929.2.-	一時閉鎖
1929.12.3	岐阜県高山町空町に再開設
1932.9.25	岐阜県高山町三之町に移転
1934.8.-	岐阜県高山町空町2903に移転
1934.11.20	閉鎖



写真④『大阪朝日新聞岐阜版』1934年10月24日
【所蔵：岐阜県図書館】

真③には、空町と並んで「東小学校前」と記されている。東小学校は現在移転しているが、29年当時は今の高山市図書館の地にあった。周りには古くから残る家があり、最後の事務所も小学校の斜向かいにあったことまでは特定できた。当時の土地の所有者は高山の豪商、永田家一族であった。

高山市図書館で当時の古地図を調べたが帝国興信所の文字はなかった。社内報『脱俗』に毎月掲載された月間調査件数からは、わずかに当時の活動が読みとれる。1年間の調査件数は、31年は100件を超えたものの他の年は毎年60件前後で推移。規模は小さいながらも確かに調査活動は行われていたのだ。

高山出張所は、富山支店の出張所扱いで、同支所長の黒田等が出張所長を兼務した。黒田の他に、常置員「堀川良次が最初の1年間。その後は奥田芳太郎、山崎与一郎が後任を務めた。当時の資料をたよりに彼らの足跡を調べたところ、堀川、奥田は不明だったが三之町に「山崎医者」「山崎タイル」という家が並び、さらに同じ三之町で硝子板を扱っていた人物に「山崎与一郎」の名前があることがわかった(『大正懐昔飛騨高山 庶民生活資料雑綴』、1983年9月)。この付近には明治・大正創業の老舗が今も同じ場所です営業しており、聞き取りの結果「山崎医者」は現在土産物屋になっていた。土産物屋と山崎の関係は判然としなかったが、山崎を知る人物に会うことができた。

一之町で1900(明治33)年から続く呉服屋を営む89歳の住浅吉さんだ。山崎が興信所の仕事をしていたという話は聞いたことがないそうだが、山崎の息子は医者で、その場所は現在の土産物屋であることが一致した。当時の状況については、商売をやっている人は代理業を引き受けることが多く、住さんの呉服屋もかつて保険の代理店をされていたという。山崎はひっそりと高山出張所の経営に携わっていたのだろうか。昭和

初期、信用調査への理解が難しい時代の話である。

■高山本線の開通 13時間が4時間20分に

1934(昭和9)年11月、高山出張所は閉鎖された。その理由は「高山本線(富山より高山を経て岐阜に至る)全通の結果之が要なきに至ったので」(『脱俗』、1934年12月)とされている。

都市では次々と鉄道が建設され、陸の孤島高山にも鉄道敷設の機運が高まっていた。岐阜―各務ヶ原間の一部開通から5年。ついに34年10月25日、高山駅が開業。全線開通した。開通祝賀式は盛大に行われ、新聞紙上は開通前から大賑わいを見せた。前日の『大阪朝日新聞岐阜版』の一面は「歴史的開通式を明日に控へ、沿線町村興奮沸る」という見出しで駅舎やトンネルの写真を掲載。同紙面には帝国興信所の広告が掲載されていた(写真④)。既に閉鎖が決まっていたからか、高山出張所の住所は記載されておらず、東京の本社と大阪本部の所在地だけが記されている。開通を祝う協賛広告であることが窺える。

全線開通によって、高山―富山間は2時間37分。かつて乗合自動車で13時間かかっていた岐阜―高山間は4時間20分で結ばれることとなった。それまで川を使って40〜50日かけて運んでいた木材は、鉄道で1、2日と格段に早く運べるようになった。しかし道路が整備され、自動車普及すると、トラック輸送に変わり、鉄道は観光客の足となった。金森氏によってつくられ、鉄道によってつながれ、観光客のために残された高山。高山出張所の歴史は目立たないものであったが、激動の高山経済を見守り、その役目を終えたのである。

帝国データバンクの出版物は創業以来、
幾多の企業広告を掲載してきた。100年前と比較して、
広告はどのような変遷をたどったのだろうか。

広告いまむかしー3

キリン

『帝国銀行会社要録』
第7版に掲載された広告



帝国興信所が1918(大正7)年に発行した『帝国銀行会社要録』第7版には、様々な企業や業種の広告が並んでいる。ほとんどは社名と事業内容、営業品目を紹介する内容であるが、その中でひときわ目をひくのがキリンの広告だ。

キリン株式会社CSV本部コーポレートコミュニケーション部アーカイブ室の関根麻里さんによると、「大正7年という、第一次世界大戦中で日本が大戦景気に沸いていた頃です。ビールの需要が伸び、当社も横浜工場だけでは生産が追いつかず、後の尼崎工場である神崎工場をつくり生産量を増やしていったという年でした」。

キリンビールの前身は、横浜の在留外国人が中心となって1885(明治18)年に設立したジャパン・ブルワリー・カンパニーである。外国法人であったため、日本人経営の代理店を通じて販売しなくてはならず、明治屋と販売代理店の契約を結んでいた。この広告はキャラクターとキャッチコピー、商品名とシンプルな構成になっているが、これについて関根さんは「明治屋さんは外国の商品を輸入して販売し、クリスマスのショーウィンドウを日本で初めて手がけるなど、センスがよくハイカラでした。その雰囲気はキリンビールの広告にも反映されているのかも知れません。キャッチコピーも、ビールの需要自体が伸びてきた時代でもあります。それを、おいしいからこれだけ伸びているんです、と品質に重ねて紹介しています」と分析する。



2014年1月3日に掲載された一番搾りの広告[写真提供：キリン株式会社]

また、大正時代はカフェやビアホールに行き、ビールを飲むという都市文化が現れ始める頃でもあった。人々は集い、ビールを片手に語り合っていたのである。当時、キリンの広告展開は、雑誌や新聞、店頭や駅向けのポスターが中心であったそうだが、1909(明治42)年には、今でいう広告宣伝カーを走らせていたという。「車体にブリキのビールびん型ボディを取り付けた宣伝カーですが、配送も兼ねていました。しかしブリキが重くて運べる量に限りがあり、実用的ではありませんでした」(関根さん)。

キリンといえば、現在はブランドも増え、有名タレントを起用したさまざまな広告展開をしている。キリンビール株式会社マーケティング部 広告クリエイティブ担当の鈴木郁真さんは「この一番搾りの広告は、2014年の年始に新聞に掲載されたものです。一番うまいビールを作るんだと宣言しているブランド広告ですね。素材のこだわり・飲み方のこだわり・つくり手のこだわりを訴求する内容ですが、今回『帝国銀行会社要録』に掲載された広告を見て、根幹となる部分は変わらないと再認識しました」と語る。

100年前の広告からは、新しい文化への期待感や、人々が集い、飲み交わっていた光景が想像できる。創業一世紀を超えて打ち出す一番搾りの広告は、品質と製法にこだわるという、揺るぎない企業姿勢を表すものであるが、そこからはいろいろな人が美味しく楽しくビールを飲んでいる姿が浮かんでくる。

NEWS

史料館ニュース



特別企画：日本の会社展 第3回

「企業博物館一逸品解題」を開催しました。

2013年10月1日から12月1日まで、「日本の会社展 第3回 企業博物館一逸品解題」を開催しました。国内外の企業博物館250館の持つ「逸品」と物語を、大小様々なパネルとデジタルパネルで展示しました。会場内では、1枚1枚のパネルをじっくりご覧になる方が多く、熱心に見学される様子が印象的でした。また、海外の企業博物館からはミュージアムグッズや図録が寄せられたこともあり、来館者の関心を集めていました。

このように国内外の企業博物館が一堂に会するという展示はこれまでない企画で、「日本にも世界にもこんなに多くの企業博物館があったとは知らなかった」という反響を多くいただきました。

最後に、ご協力いただいた企業博物館、来館者、関係者の皆さまにこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

『別冊 Muse2013』を刊行

昨年9月に『別冊 Muse2013』を刊行しました。テーマは、「日本の会社展 第3回 企業博物館一逸品解題」の開催に合わせて「産業文化博物館 広がる、重なる、繋がる」。企業系あるいは産業系博物館について、その取り巻く状況や、M(Museum)L(Library)A(Archive)の連携という無限の可能性を持った広がりや、インタビューや寄稿、座談会で構成しています。

巻頭では歌手の石川さゆりさんに、消えゆく唄をつなぎ、後世に伝えていくご自身の活動について語っていただきました。座談会「Talk Session 白熱メッセージ」では様々な企業博物館に携わる方々により、従来の企業博物館のイメージを大幅に広げる新鮮なお話が繰り広げられました。

▶▶▶入手をご希望の方は電話(03-5919-9600)かメール(shiryokan@tdb.co.jp)にて送付先をご連絡ください。



テーマ展示：後藤義夫第3代社長没後10年記念 「時代を拓く。明日をつかむ。 未来への伝言」開催中

現在、常設展示室「テーマ展示」コーナーでは、「後藤義夫第3代社長没後10年記念 時代を拓く。明日をつかむ。未来への伝言」を開催しています。今年創業114周年を迎えた帝国データバンクにおいて、中興の祖とも言うべき第3代社長後藤義夫の没後10年を記念し、その軌跡を数々の言葉でご紹介しています。





表紙のご案内

『創業者後藤武夫像の銘文』

1926(大正15)年12月に竣工した帝国興信所本社ビルの敷地内には、後藤武夫の銅像が建立されていた。銅像に刻まれたこの銘文には、武夫の出生から帝国興信所、日本魂社設立に至るまでの略歴が記されている。また、この銅像は社員や武夫が学資援助をした者で組織された桜会ら、1,000名の出資によってできたものであること、銅像を鑄造した北村西望の名前なども記されている。銅像は戦時中の金属供出で現存していないが、この銘文だけは残っている。

帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区本塩町22-8 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越し下さい。

ご利用案内

〔入館料〕 無料
 〔開館時間〕 10:00～16:30(入館は16:00まで)
 〔休館日〕 土・日・月曜日および祝日、年末年始
 (その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

〔JRご利用〕 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分
 中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分
 〔地下鉄ご利用〕 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩9分
 都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分
 丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し越しください。
 なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどを紹介しています。

www.tdb-muse.jp